

GREEN BELT SERIES

日本の説話

神田秀夫

筑摩書房

神田秀夫 (かんだ ひでお)

1913年東京に生まれる。1936年東京大学国文科卒。
現在共立女子大学教授。古代日本文学専攻。主著
「現代俳句入門」「古事記の構造」「紫式部」

日本の説話

グリーンベルト・シリーズ 17

昭和38年4月30日 初版発行 ©

¥ 200



著者 神田秀夫

発行者 古田晁

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 (291) 7651~5 振替東京 4123

印刷製本 中央精版印刷株式会社

日本の説話

神田秀夫



筑摩書房

はしがき

今日では、もう、みんなが話に夢中になるということとはなくなつた。話というものは、何かに驚いた人間がはじめるものであろう。聴き手の前に実物がないから、はずむのだが、今はもうたいていのことは、新聞で知っている、ラジオで聴いている、テレビや映画で見ている。だから、だれも第一、驚かないし、聴き手の方も、ああ、あれか、と思うだけで、興味がない。見てゐるということは、話を要らないものにする。百聞は一見に如かずというが、見られないからこそ聴くので、一枚でも写真を見てしまうと、それだけでなんとなくわかつたような気がしてくるものである。テレビはいま、そうして、みんなを「なんとなくわかつたような気」になる人間に仕立てつつあるわけだが、テレビの前は映画がそれをやっていたのであり、お見合の写真なんてものは明治のむかしからそれをやっていたのである。

写真でなくて、舞台で見られるということでも、おなじである。話でしか聴けないというよりは強い魅力である。だから、今でも読まれている説話集で、いいものは、その国の演劇の花が開く前にできたものが多い。「エプタメロン」はモリエール以前に、「カンタベリ物語」はシェイクスピア以前に、「太平広記」は関漢卿らの元曲以前にまとめられた。日本でも「今昔物

「語集」がまとめられた平安時代の末（院政の初めごろ）には、お能や狂言さえ影も形もなかった。

そのころはお寺が、話の放送局だった。「カンタベリ物語」でも、カンタベリへ巡礼に行く道づれが話をはじめたことになっているが、日本でも当時、お寺ほど人の集まる所はなかったらしい。どこそこに説経があった、法華八講をしたなどというとき、きまっつて、「あの人来ていた？」「もちろん」というような会話がきかれたという（枕草子三一）。なにしろ催し物のごく少ない時代だから、説法が一つの催し物でもあった。万障お繰り合せなんていわずとも、話に飢えている多くの人びとが、ちゃんとお繰り合せになっておいでくださる。それをだしにつかって、自分たちの世間話をし合うために出かける人びともいたであろう。坊さんの方でも、因果応報を説くにも、世俗の例をあげて説く方が、善男善女にはわかりやすくもあるし、また、感銘も深い。だから、ふだんから、話を仕入れておく。メモを取っておく。また、そうして話を集めようとつとめなくとも、自然に集まってもくる。身上相談、訴え、ざんげ、愚痴、なんでも聴かされる。

話というものは見さかいのないものだから、すれば大ていどこかに差しさわりがある。お寺がいちばん差しさわりが少ない。もったい、お寺だって、仏法をそしり、坊さんのすること、悪くいったら追いだされるが、それをしないかぎり、気楽にものが言える。公家とか武家とか、

世俗の階層にとらわれないでいられる。実をいえば、それが魅力で、院政時代、鎌倉時代には、あんなに法師になるものが多かったのである。無常を感じたということもあるが、多くは精神の自由を求めたのである。

宮廷では、そうはいかない。平安時代の公家は権力を持っている。当時の宮廷は、江戸時代の武家の城内とおなじことである。そこで何か差しさわりのあることをいったら、とんでもない目にあう。だから、うっかり話もできない。源氏物語が、これは「そらごと」であって「まこと」ではありませんという建前たてまえで書いたのも、近松門左衛門が武家のことを浄瑠璃に仕組むときに、これはむかしのことで、今のことではありませんと、いわゆる時代物にしたのと、おなじわけであった。そこでは話の場は、ごく親しい気ごろの知れた数人のあいだにかぎられた。源氏物語の帚木はきぎの帖に描かれた雨夜の品定めのように、内輪の座談の会が、せいぜいだった。話の種はあるのだが、話の場がないから、つまり「お話にならない」のである。

だが時の流れほど恐ろしいものはない。御堂関白道長みどう（九六六—一〇二七）・宇治関白頼通よりみち（九七四—一〇四一）の二代が過ぎると、世の中は変わりだした。このときから南北朝時代（十四世紀）にかけては、それまで四百年かけて築きあげられた公家文化の大伽藍が、三百年かけて炎上し、燃え崩れ、焼け落ちる、貴族社会の崩壊期である。この三百年間が、日本の説話にとっては最大の収穫期であった。——こういうと、説話というものが火事場泥棒か何かのようにきにきこえて語弊があるが、政

権が公家の手を離れだして、徐々に武家の手へ移っていく、そういう過程に入つたために、これまで説話の自然な展開を圧していたタブー（禁忌）の重石^{おもし}が取り除かれたのである。かくて俄然、膨大な説話集となつて現われたのが今昔物語集三十一巻であつて、現存するもの二十八巻、一〇四〇話を収録している。平安朝というゴブラン織の裏を返して、その刺繍の糸の、数々の継ぎ目、結び目をあらわした。多くの説話集がこれに続いた。

今昔物語集は、どの話もみな「今ハ昔」と語りですが、それは、もう過去になつた、現在とはなんの関係もない話という意味ではない。近松のことばを借りていえば、「昔は昔の今日」（井筒業平河内通）である。公家と武家と山法師とが三つ巴^{どもえ}になつて争いだした渦の中で、従来の型どおりの生き方では、生きていけなくなつた人びとが、この濁悪世^{じよくあくせ}をどう生き抜こうかと思つて、周囲の人の一言一行、一挙一動を見まもるようになったことが、さまざまに「昔」の出来事を、故人の逸話を、思いださせる機縁となつたのである。

といつても、堤を切つて河が氾濫、横流しているような時期だから、人間を肌理^{きめ}のこまかい筆で、ていねいに描いていくような、ゆとりはない。描くより述べる。事件だけを、その断面だけを、提示する。こちらで補つて読まないと、まとまつた人間の像が得にくいようなものも少なくない。そのかわり、そういう歴史の河の堤が切れるような荒場にぶつかったことのない和歌や物語などには絶えてみられぬ潑刺たる感性、ソノ物ズバリの把握力があつて、苛酷な現

実の篩ふるいにかけられながら、その網の目をくぐって生きのびようとする生き物の表情を、まざまざと浮べてくる。

日本の説話集の多くは、そういう渾沌カオスの状態で人間をとらえたものである。それがいいか悪いかは別問題として、ほかの洗練された個々の作者の創作には求められない何かがあることは確かである。

ところで、今昔物語集が現われる四世紀ほど前にも、日本には一度、過渡期があった。大化の改新から奈良時代にかけての一連の動きは、大古墳を置き去りにして、つぎに來たるべき平安文化の礎石をすえた。神々の退席は、神々を話の種にすることを許した。奈良時代の初めに風土記・古事記・日本書記が、平安時代の初めに日本靈異記が、多くの説話を収獲したのは、このような事情によるものであった。

かくて、ある時は現実の苛酷を防ぐ盾たてとなり、ある時は文芸の貴族化を攻める矛ほこともなつて、歴史にからみつきながら、古典の裾野にひろがって來た庶民の文芸——それが日本の説話である。

この小冊子は、むろんその宝庫のすべてではないが、一を聞いて十が知れるようにはしたつもりである。

一九六三年四月馬鹿

著者

目次

はしがき

富士と筑波…三

八俣の大蛇…七

おとめの松原…三

三輪の山…六

賀茂の社…三

さほびめ…五

角がある人…四

羽衣…五

奈具の社…七

田道間守…四



離宮の鹿… 六

衣通の王と軽の太子… 七

小子部のすぎる… 九

狐の妻… 二

鷲と嬰兒… 六

奈良の商人… 九

兎菩薩… 六

九色の鹿… 二〇

莊子… 二〇

卓文君… 一八

久米の仙人… 二



関寺の牛仏…二七

源信の母…三

悪人往生…二九

男根消失…二九

終始一情…二四

馬盗人…二四

利口…二五〇

夫婦別れ…二五

信貴山…二〇

増賀上人…二六

道命…二九



ぼた餅…二八

百鬼夜行…二八

清徳の聖…二八

絵仏師良秀…二八

藤原忠家…二八

玄賓僧都…二八

青砥藤綱…二八

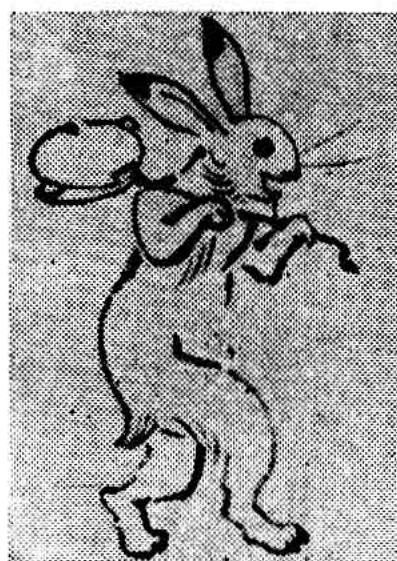
黒子…二八

白蛇…二八

虎…二八

注…二八

あとがき



富士と筑波

むかし、神の母が、子どもの神々のところをめぐりあるいていたが、駿河^{するが}の国の富士の岳^{たけ}まで来て、ついに日が暮れてしまったので、「泊めておくれ。」といった。すると富士の神は、「早稲^{せいなめ}の新嘗^{にいなめ}で、家の内のもの忌^{いみ}をしていますため、泊めてあげられません。今晚だけは堪忍してください。」と、ことわった。それをきいて、母の神はうらんで、泣いてののしり、「親でも泊めたくないというんだね。よろしい。もうこれからは、お前のいる山は、死ぬまで、夏も冬も、霜が降り雪が降り、寒さ冷たさ重ねがさね、人の子は登らず、飲物も食物も供^{そな}え手がないから、おぼえておいで。」と言いつて、たちまちに筑波の岳^{たけ}に登り、また宿を請うた。すると筑波の神は、「ほんとは今晚は新嘗なのですけれども、お母さまのおっしゃることですから。」といって、泊めて、お膳を供え、うやうやしく母の神をもてなした。嬉しくなった母の神は、「やっぱり私の子どもだね。さすがはこの子のお宮だよ。天と地とがあるかぎり、月と日とがあるかぎり、人は集まり御酒^{みき}はそなわり、絶えることなくますます栄えて、千年も万年も、楽しみはつきますまいよ。」と誓約した。こういうわけで富士の岳は、年中、雪で登れず、筑波の岳は

今でも人が往つては、集まつて歌つて舞つて、飲んで食うのであると、常陸国風土記ひたちのかくにに書いてある。

まことにどうも、なんとも割りきれない矛盾した話であるが、あるいはそこがこの話の特質なのかもしれない。新嘗にいなめは、もちろん、その年にとれた稲の初穂をまず神前にそなえて、豊作を感謝し、それから、その新米を試食する、農村でもっとも大きな行事——収穫祭であるが、まず神前にそなえるにあたつては、ことに上古の関東地方では、もの忌が嚴重で、潔斎して神前に仕える女性以外は、全員、家の外に出され、家じゅうが祓はらい淨められた。だから、その夜はかまどに火がなかったはずで、たとえ母親であろうとも、訪問者は旅人あつかいで、屋内に入れなかったらしい。だが、人間の世界の話としていうならば、母にとっては、娘や息子にあらえるということが、ことに老おいては、唯一の生き甲斐である。これを拒むという法はないと思うが、ただ、年をとると、コントロールがきかなくなるらしく、とんでもない時に、ひょっこりやつて来る。この話はその極端な例で、もっとも重要な勤めの最中に飛びこんで来たわけである。そこが、この話の味噌だ。

だが、現実には、そんなにまでして、潔斎している女性に、まさにその晩に言い寄ろうとする男さえあつたらしく、万葉集の東歌あずまうたをみると、女の歌で、

誰たれぞ此の屋やの戸と押おそぶる新嘗にいなめに我わが夫せを遣やりて斎いはふ此の戸とを（三四六〇）

というのがある。また、女性のなかにも、そういう厳粛な晩ではあっても、恋人までしめだしてはおけないという女もあった。

鳩鳥にはどりの葛飾早稻かつしかわせを饗にへすともその愛かなしきを外とに立てめやも（三三八六）

だから、どうやら、現実の女性にも、富士タイプと筑波タイプとはあったらしいのである。山そのものに対する感じ方としても、そのとおり。富士の美しさを初めて発見した山部赤人の歌は、万葉集にあるが、万葉集を全体としてみると、まだ富士よりも筑波の歌の方が多く、当時、姿が美しいのを見ただけでその山に感動したのは、山部赤人くらいなもので、ほかの多くの歌は、信仰上、実用上、何か感ずるところがあつて、それが絡んだ目で山を見ているのである。

山高きがゆえに貴たつとからず、木あるをもつて貴しとなす、ということばがあるが、この「富士と筑波」の話にも、それに近いものが、何かあるようである。まあ、新嘗とある以上、水田耕作がはじまった弥生時代以後の話として受けとらなければなるまいが、農民が伝えた話にしては、山が少し高すぎて水田に結びつかない。たぶん、この話は、こうなる前がまだあるのだろう。縄文時代に原形があるのだろう。当時、矢尻にする石は生活の必需品だったから、それを入力するために交易が行なわれた（注1）。ところが富士は、その点、非生産的な山で、そういう石を産出しなかった。山梨・長野二県の人びとは和田峠の黒耀石の矢尻を使っていた。静岡